

## 嘉納治五郎主導による水術の再編に関する研究

真田 久 椿本 昇三 高木 英樹

Hisashi Sanada, Shozo Tsubakimoto and Hideki Takagi : Reorganization of Suijutsu led by Kano Jigoro. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 52 : 315-326, July, 2007.

**Abstract :** A study was conducted to clarify the features of *suijutsu* (Japanese traditional swimming) led by Kano Jigoro (1860-1938). In 1898, Kano organized *suijutsu* for the students at his private school, *Zoshikai*, and consequently *suijutsu* was named *Zoshikai-suijutsu*. Most of the swimming styles taught were derived from *Nihon Yueijutsu* written by Ota Sutezo (1825-1892), who had tried to integrate all the traditional swimming styles. Kano agreed with the idea of *Nihon Yueijutsu*, and tried to spread this swimming style by holding swimming athletic meetings and introducing a step-system like that in judo.

Kano also organized *Koshi-eihou* for the students of Tokyo Higher Normal School in 1903, when he was president of the school. This swimming style was composed not only of *Nihon Yueijutsu*, but also various traditional swimming sects, such as *Shinden-ryu*, *Kankai-ryu*, *Kobori-ryu* and *Suifu-ryu*. Nakano Jiro, who was a *Shinden-ryu* swimming teacher, selected the swimming styles for *Koshi-eihou*. Kano tried to reorganize *suijutsu* and to have it introduced into the school education system in Japan. All first-grade students were obliged to participate in swimming practice for two weeks to learn *Koshi-eihou*. As most of the students who graduated from Tokyo Higher Normal School became teachers at normal schools and middle schools, the swimming style of *Koshi-eihou* was introduced into various schools all over Japan.

The features of the reorganization of *suijutsu* led by Kano were as follows :

- While Kano tried to integrate all the traditional swimming styles, he organized *Zoshikai-suijutsu* and *Koshi-eihou* for the training of the young body and for cultivation of the mind.
- *Koshi-eihou* was organized at Tokyo Higher Normal School from the various traditional swimming sects, with the aim of being introduced into the school education system in Japan. Kano asked swimming teachers to devise a swimming style for *Koshi-eihou*.
- As Kano held swimming athletics meetings while practicing, the effect of the practice became evident.
- In the same way as for judo, Kano adopted the step-system into *suijutsu*.

**Key words :** higher normal school, swimming, Zoshikai, Koshi-eihou

**キーワード :** 高等師範, 游泳, 造士会, 高師泳法

### I はじめに

嘉納治五郎（1860-1938年）は日本の伝統的な柔術を再構築し、そこに教育的な意味を付与し振興をはかった。柔道以外にも、長距離走や学生スポーツの振興、オリンピック運動への参加などに

おいて嘉納は功績を残しているが、水術についても嘉納はその再編を試みた形跡がある。嘉納の関与した水術について『日本水泳史』を著した石川（1960）は、平体、横体、立体の三つの基本的な泳法の分類は「嘉納三体流」と呼ばれていたこと、これを基本とした水府流太田派の泳法は東京高等師範学校（以降「東京高師」と略す）の游泳実習

筑波大学人間総合科学研究科

〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

連絡先 真田 久

Institute of General Human Sciences, University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba-shi, Ibaraki, 305-8574

Corresponding author sanada@taiiku.tsukuba.ac.jp

を通して「高師流の俗称まで生じる程の発展を見たり（石川, 1960, pp. 313-314）」と述べるなど、嘉納が水術に関わった事に言及している。また講道館刊行「嘉納治五郎」(1964)では、将来教師となる者は游泳の心得がなくてはならないという嘉納の主張により、1905年以後、新入生は旅費と滞在費を学校から支給されて游泳実習に参加することになったことが記されている。これらは嘉納治五郎が海浜での游泳実習に積極的に関わったことを示唆している。しかしながら、嘉納がどのような考え方で水術に関わったかについては、これまで明かされていない。そこで本研究は、嘉納治五郎が関与した水術の再編について、それらの基本的な理念と泳法について考察し、嘉納主導による水術再編の足跡とその特徴を明らかにするものである。

「水泳」、「水術」、「游泳」に関する用語については、本論文においては次の意味で用いることとする。水府流や神伝流など、いわゆる流派によって示される伝統的な泳法を示す際には「水術」、海浜や河川で行われた水泳を「游泳」、その実習を「游泳実習」、それらを総称する概念として「水泳」を用いる<sup>注1)</sup>。

## II 本 論

### 1. 造士会水術とその泳法上の特徴

#### 1) 造士会における游泳

1882年に講道館柔道を開設した嘉納治五郎は、柔道の普及をはかりながら、より広く国民体育を振興することを目指していた。嘉納（1917）の考える国民体育とは、国民一人一人が強健な身体と健康を保って労働に従事しながら生きていくための体育で、器用さに關係なく誰でもできる、費用がかからない、設備がいらない、男女年齢の區別なくできる、という観点から、柔道、歩行・駆ける事（遠足や長距離走）と游泳の実施を提唱した。嘉納は彼の私塾（嘉納塾）で1897年には游泳実習を取り入れている。国民が行うべき体育として游泳を早い時期から重視していた。嘉納は1898年8月、いくつかの私塾をさらに創設し、それらの私

塾をまとめた「造士会」を創立した。「造士会」の目的と事業は次のように規定されていた。

「目的 第一条 本会ハ造士会ト称シ少壯ノ者ヲ指導シテ立身ノ方針ヲ定メ心身ヲ鍛錬セシムルヲ以テ目的トス」

一 塾舎ヲ設ケテ本会ノ趣旨ニ基キ子弟ヲ監督薰陶スル事

二 道場ヲ開キテ講道館柔道ヨリ始メ漸次諸般ノ武芸体操ヲ教授シ之ヲ獎勵スル事

三 雑誌ヲ發行シテ本会趣旨ノ貫徹ヲ図ル事」（國士1, 1898, 造士会規則 p. 4）

一に述べられている塾舎は、1882年より存在していた嘉納塾と、1898年に結成された成蹊塾（成年以上の塾生）、全一塾（少壮学生）、善養塾（10から20歳の塾生）などであった。これら4つの塾を統合する組織が造士会で、機関誌「國士」を1903年まで毎月刊行した<sup>注2)</sup>。造士会の目的第一条の二で述べている「諸般ノ武芸」について、具体的に取り組んだのは水術で、夏期には水術を通して青少年の心身の育成が行われた。

1899年、造士会は機関誌「國士」第9号から12号の誌上で、太田捨蔵（1831-1892年）の遺稿『日本游泳術』を連載した。太田は水戸の水府流の流れを汲む人物であるが、幕府の講武所において水術の助教を終えた後に脱藩し、やがて1878年、隅田川に水泳場を開いた。ここでの水術が後に水府流太田派となるが、太田は水術の一流一派に偏ることなく、各派の長所を取り入れ、水術の普及を目指したことが前文で説明されている。

「故師起稿の目的は、世の游泳家が往々流派に拘泥し、狭き範囲内に偏執するを厭ひ、其弊風を一洗し、廣く諸流派の長を探り、完全なる日本の游泳術を世に示さんとするに在りき」（國士9, 1899, 附録日本游泳術前文）

造士会会长であった嘉納治五郎は、さらに1900年に『日本游泳術』を造士会叢書として出版し、次の序文を寄せた。

「從來我國に存在する武術の體育に適するものは之を研窮し發達せしめて以て我國民體力の増進に資せざるべからず予囊に諸流の柔術に基き講道館柔道を創始し子弟に授くる茲に

年あり亦以て國民體育の一端と為すに外ならざる也游泳の術の如きも從来諸國に流派ありて各流を傳へて相研磨せり士の斯道を以て祿を食む者亦多かりき是を以て其技甚だ進み其教授の法の如き亦頗る見るべきものあり今日採りて之を我體育の法に用ふれば予其甚だ適当なるを信ず」(高橋雄次郎, 1900, 序文)

ここでは、柔術からつくられた講道館柔道と同様に游泳術も体育の一つとして価値があることが述べられている。嘉納は『日本游泳術』の理念、つまり、各流派の水術の統合をはかることについて、国民体育という観点から関心を寄せていたことが読み取れる。

太田捨蔵の遺稿『日本游泳術』と嘉納を結びつけたのが、講道館柔道の門弟、本田存(1871-1949年)であった。本田は17歳の時、太田捨蔵に弟子入りして水術を修め、1900年に師範となった。本田は講道館柔道においても活躍し、1897年に講道館柔道三段に昇段し、研究会主幹の任に就いている(國士22, 1900, 講道館記事 p. 39)。一方、1899年に東京外国语学校の韓国語科を卒業すると同校助教授に、1904年には教授に就任するなど、外国语教育の面でも秀でていた(浦辺秀夫, 1952)。

本田を通して太田捨蔵の理念と活動について、嘉納は充分な知識を得た。本田は1898年8月、国内初の国際水泳競技会である「内外人競泳大会(横浜)」の主催委員を務めている。この大会は横浜アマチュア・ローイングクラブ(Yokohama Amateur Rowing Club)と水府流太田派との競泳の試合で、報告(國士1, 1898, p. 44)によれば、100ヤードと440ヤードは太田派が勝ち、880ヤードは英国人が勝った。翌1899年隅田川で開催された「内外人競泳大会第二回戦」においても本田は試合終了後に講評を述べるなど、主催委員の責を全うしている(國士12, 1899, pp. 32-33)。武術の一つに数えられる水術は、他との競泳は行わないのが通常であったが、外国人クラブと公開の競技を実施したことは、本田が当時の水術界において、進歩的な視野で活動していたことを示している。講道館の門弟でもあった本田存を通して、太田捨蔵の游泳術の理念とその進歩性が嘉納に評価

されたものと思われる。

## 2) 造士会水術の設立とその理念

造士会としての海浜での游泳実習は1899年の夏から始められた。場所は相州三浦郡松輪で4週間にわたり50名の青少年が参加した。本田は副監督兼游泳教師として活躍した(國士12, 1899, 33-35)。游泳実習の内容は、午前午後とも2時間ずつで、夕食後は魚釣り、散歩、読書、テニス、相撲などを、学生達が自由に行った。また游泳の練習も、打球戯を行う中で泳ぎの技術を修得させたり、巻き貝を取って潜水の技術を教えたり、波乗り、地引き網など多様であった。嘉納は游泳実習を「身体の鍛錬と精神の修養の為め」と位置づけ、以下のように述べている。

「一 諸子は一たび目的を定めば之を遂行するの決心あるを要す、学海の航海は平坦ならず世路の困難寧ろ之にまさるものあらん、諸子は処世成功の人たらんには平素忍耐の習慣を養ひ自ら求めて困難の事を嘗め、其堪へ得ざるに至らんとして至らざる極の妙味を見るに勉めよ、蓋し困難にのぞんで忽ちに心くちくれば之れ及ばざるなり、若し困難其身に遇ぐれば却りて心身を害す、不及なく過ぐるなきの程度を自覚するを要す

一 諸子は学校にて多数共同して教育せらるれども、真に共同的生活の味を嘗めたるにあらず、之れには必ず四五十のもの或る期間、一定の処に生活を共にするによりて初めて経験せざるべからず、共同生活には實に幾多の教訓の含まれ居るを忘るべからず、「互いに譲り合ふこと」なども後來諸子が、国家的一个人としての生活には欠くべからざるものならん」(國士60, 1903, p. 51)

游泳の実習を通して、日常では味わえない困難な課題を克服し、共同生活を送る中で得られる忍耐力や共同の精神を嘉納は尊んだ。さらに、游泳の德育的価値について、機関誌では次のように語られている。

「彼の海浜を逍遙して潮風に其の面を曝し、岩頭に立ちて侠勇たる波濤の状を觀んも、都門十カ月の紅塵は洗ひ去られ、高潔雄大なる

心身を得るに至らん。況んや廻瀾を衝き怒濤と鬪ひ、或は十尋の水底を潜行し、又は萬頃の蒼波を凌ぐに於てをや。愉々快々の間、不知不識に志望を大にし、艱難に堪ふるの素を養ふを得んもの、夏季に於ては水泳術の如きもの又他になかるべし」（國士 12, 1899, p. 34）

青少年の心身の鍛錬が造士会の目的であることから、宿泊を伴う海浜での游泳がそれを達成するための重要な活動として位置づけられていた。身体の鍛錬とともに心を練る体育を考えた嘉納の考えに基づいて游泳が実施されたといえる。

1900 年には、相州上宮田にも第二水泳場を設置して多くの会員が参加できるようにした。この年 9 月 9 日に小石川の講道館において、游泳部結了式及証書授与式が行われた際、嘉納会長は造士会で行われている水術を「造士会水術」と呼称することを発表した。

「本年游泳部諸子の伎倆は、其進歩顯著なるものありしにより、従来の甲以下六級の上に、更に初段より十段に達する十個の階段を設くる事とし、且つ名称も、講道館柔道に対して造士会水術と称し、世上普通の水泳術以外に、一生面を開かんとする由を述べられ、且つ本年直ちに、一人の初段昇級者を出したるは、当人の勉励素より其功なきにあらねど、亦た游泳監督者の教導宜しきを得たるものなり」（國士 25, 1900, p. 64）

造士会水術の結成の意図については 1901 年の「國士」(36, pp. 36-42) でも説明されている。そこでは柔道に次いで游泳術に青少年の教育という観点から重要な地位を与えてきたことが述べられている。具体的には『日本游泳術』を刊行したこと、松輪と上宮田に水泳場を開設したことなどの実績をあげ、講道館柔道に対して「造士会水術」と改称して従来の階級甲以下六級の上に、初段から十段までを設置することが宣言されている。1900 年秋以降、機関誌では「造士会水術」の名称が用いられるようになった。1903 年 8 月 13 日、嘉納は次のように講話した。

「本日松輪に於て水術大会を見るに前年に比

して好成績を得たり、抑、造士会水術は既に我講道館に於て、我国在来の柔術諸流中の粹を抜きて講道館柔道を大成せるが如く、各水術流派出身の人に請ふて水泳監督の任を嘱し、各流の長處を取りて造士会水術を授け来れり、水術は心身鍛錬の上に大なる効果あるは疑いを容れず、若し夫れ、修めて其神に入り、機を把らば其値決して浅からざるべし、

諸子特に心をこめて其修行を怠る勿れ、他日学業就りて世に出て実行の舞臺に立ち、或は軍人となり或は大政治家となり、或は大実業家となり、或は大教育家となると共に、又水術の先生たることは四海環海の我國民としては願はしき心掛ならん、従來の如く尚一層勉励して好成績をあぐるに熱心なれ」（國士 60, 1903, pp. 51-52）

嘉納は、各水術流派出身の人に請ふて、講道館柔道に匹敵する水術の再編を意図し、「造士会水術」を設立した。嘉納自ら水泳場に出向いてその趣旨を指導した。造士会水術の実施の中で、段級制の設置とともに特徴的な事は游泳大会の開催である。游泳大会は 1900 年から行われ、決められた泳法を披露する泳ぎ（式游）とともに、競泳や打球戯が行われた（國士 12, 1899, pp. 32-35）。1900 年の游泳大会では、嘉納会長のもと、60, 100, 200, 400 ヤード競泳などが実施され、9 月に行われた造士会游泳部の結了式にて表彰された。また 1901 年の游泳大会では、上記の競泳のほか、団体競泳、潜水、打球戯、実習で行った諸泳法模範、水画、甲冑御前泳などが披露された（國士 36, 1901, pp. 38-43）。

游泳における式游と競泳の実施により、実習の効果を実践者は容易に実感でき、見ている者も視覚的に効果を認識できた。式游と競泳は柔道における形の披露や乱取りなどに匹敵すると考えられ、このような方法は、伝統的な武術を再編する嘉納の手法とみる事ができる。

### 3) 造士会水術の游泳教目

造士会水術は 1900 年から第一水泳場（松輪）と第二水泳場（上宮田）にて実施された。前者は三浦半島の南端に位置し湾をなしているため、荒波

や風の影響は少なく、游泳には格好の場所であった。また前面に太平洋が広がるさまは、嘉納の考える游泳実習として理想的な場所であった。第二水泳場の上宮田は、湾の南方に山があるため、吹きさらしになることがあり、1901年には上宮田の南方の金田に移して行われた。第一水泳場の生徒は嘉納塾の熟生がほとんどで、監督は嘉納塾の富田常次郎が就いた（國士 60, 1903, pp. 48-52）。游泳教師には神伝流出身の鈴木和志理、観海流出身居相藏、そして造士会水術二段の杉村陽太郎の3人であった。一方の第二水泳場は、すべて東京高師の附属中の生徒であった。監督は東京高師の山内繁雄、游泳教師は水府流太田派出身の後藤武保が主任、補佐として同派の佐藤忍、千葉明が務めた。第一水泳場が嘉納塾の熟生対象に各流派の師範が集まって教えたのに対し、附属中の生徒を対象とした第二水泳場では、水府流太田派を中心に游泳実習が行われた。

具体的な游泳教目は、第一水泳場と第二水泳場ともに1900年から1902年までは同一のものであり、1900年の游泳教目は次の通りであった（國士 24, 1900, pp. 52-53）。

表1から造士会水術では、波濤法以外はすべて『日本游泳術』（1899）に書かれている游泳教目であったことがわかる。1901年と1902年の内容も、丁の級で、水中一重伸の代わりに水中両輪伸が加わった以外は同様である。このことから、造士会水術設立時の游泳教目は、『日本游泳術』の游泳種目を選び出して編成された水術といえる。ただし、游泳大会の実施と段級制度の導入は嘉納の企図によるものであり、それらを総合して考えられたのが「造士会水術」であった。

1903年になると、表2に示すように第一水泳場の游泳教目がやや変化した（國士 60, 1903, pp. 47-48）。

甲、乙という上級者の游泳教目には、三段伸、片抜手雁行、踏水術などがあり、水府流太田派以外の各流派の泳法がみられる。第一水泳場は『日本游泳術』を主にしながらも、神伝流、観海流の游泳教目も組み入れた。つまり、これまでの造士会水術に他の流派の教目を付加するという修正を加えたことになる。

一方の第二水泳場はほぼ、『日本游泳術』の游泳教目のままであった。翌年以降は、機関誌「國士」

表1 造士会水術の游泳教目（1900年）

|     |                                     |
|-----|-------------------------------------|
| 戊ノ下 | 敲足、押手、平泳                            |
| 戊の上 | 平泳、両輪伸、一重伸                          |
| 丁   | 両輪伸、一重伸、大抜手、水中一重伸、直跳、逆跳             |
| 丙   | 二重伸、片抜手一重伸、平伸、大抜手、立体、水中平伸、諸抜手、浮身、逆跳 |
| 乙   | 諸手伸、継手伸、抜手伸、小抜手、立体、水中蹴伸、逆下、浮身       |
| 甲   | 救助法、波濤法、諸跳法、略体諸泳法、諸心得（口伝）           |

表2 造士会水術（第一水泳場）の游泳教目（1903年）  
下線は『日本游泳術』（1899）以外の流派の教目名

|     |   |
|-----|---|
| 戊ノ下 | 敲足、押手、平泳                                |
| 戊の上 | 両輪伸（草）真、一重伸（二段伸）、平跳、直跳、                 |
| 丁   | 片抜手、大抜手、水中羽交伸、逆跳（翡翠）、順下                 |
| 丙   | 二重伸、継手伸、諸抜手（イナ飛）、水中跳伸、諸手伸、片抜伸           |
| 乙   | 三段伸、抜手伸、小抜手、同略体、蛙股平伸、片手抜雁行、踏水術初步、小手搦、逆下 |
| 甲   | 踏水術諸法、波濤法、諸手抜、手足搦略体諸泳法、諸心得              |

の発行が途絶えてしまうので、その後の第一水泳場での詳細はわからない。しかし東京高師附属中の游泳部が翌1904(明治37)年に富浦に水泳場を設けたのに伴い、本田存は、附属中の游泳実習に力を注ぐことになった。造士会水術の第二水泳場は、附属中の游泳部(桐陰会游泳部)として引き継がれ、他流派の水術師範を呼ばずに、本田と附属中の卒業生、つまり本田が直に教えた者を教師にし、游泳実習が行われていった。

これを整理すると次のようになる。嘉納は水術の再編を試みる際に、まず太田捨蔵の遺稿集『日本游泳術』を根拠とした。それはこの泳法が多くの水術の長所を集めたものと判断されたからであった。そしてそれに段級制や游泳大会を組み入れて「造士会水術」と称して相州において実施した。やがてこの水術は、いくつか他の流派の泳ぎも組み込まれた。しかしながら、『日本游泳術』の泳法が主体であることには変わらなかった。「造士会水術」は太田捨蔵の『日本游泳術』の泳法に、嘉納の考えた游泳大会や式游などの手法を取り入れて編成された水術といえる<sup>注3)</sup>。

## 2. 高師泳法

### 1) 高師泳法の創設とその理念

1902年東京高師でも游泳実習が始まられた。校友会游泳部がこの年7月に設立されたからである。その経緯については次のように校友会誌に書かれている。

「小林和一、秋田友作、澤村大宇の三名相会し、談偶々游泳の奨励海水浴流行の事に及ぶ、曰く、是れ一般流行と云ふか、曰く、海の日本、体育の勃興する考ふれば、是れあに一時の流行にして止まんや、曰く然り、然からば游泳部を運動部の一に加ふる建議は如何に、曰く諾、即ち明治三十五年六月十日同志者百二十有余名の連署よりなれる一片の建白書は、首尾良く会長の認可を得、学校も亦大に此の挙を賛して、多額の費を補助する事となれり、(中略)六月中は品川沖に舟を浮かべて、演習を試み、七月十日より此道の大家小堀平七氏を聘し房州北条の海浜、砂白く水清き処に於て、二週間の游泳は演習されたり」

(校友会誌2, 1902, p. 124)

この記述では、当時の学生が游泳の奨励、海水浴の流行という社会的背景を踏まえて学校当局に建白した際、校友会会长の嘉納が大いに賛同し、海浜で行う游泳実習につながったことが記されている。東京高師游泳部の活動は、夏の游泳実習の実施に重きが置かれた。これは、造士会水術として海浜での游泳実習を行ってきた嘉納の考えによるものであることは明らかである。「本校創立四十年記念校友会発展史」(1911)の中で記述されている游泳部史や東京高師校友会誌によれば、初期の游泳実習については次のように記されている。

1902年7月、総勢60名が房州鏡ヶ浦へ出かけた(汽船で夜8時頃出発し、北條に朝4時頃到着)。期間は2週間。潜水と浮身の練習を行い、師範は小堀流の小堀氏。翌1903年は、2週間から2ヶ月に延長されて実施された。三里遠泳を6回まで実施したところ、18名が完泳した。師範は神伝流の上田征爾。1904年は60名余りが参加し、三里遠泳では43人が成功した。この時に高師泳法が編み出されるのだが、これについては次のように記されている。

「中野次郎師範(東大)が神傳流の達人に拘はらず破天荒の大英断で水府流の伸游、小堀流の踏水術、観海流の平游など代表的な華を抜き然も「扇横游一段」などいふ科学的の名まで附して教育的な「高師游法」の教程を作り上げられたことは永久に滅せぬ巨人の足跡である」(本校創立四十年記念校友会発展史, p. 152)

1904年は、造士会水術の第一水泳場において諸流派の泳ぎが付加された翌年にあたり、これと同様の流れと解釈できる。「高師泳法」が開発された直後の校友会誌には「游泳練習の方針」の中で、水府流の伸游(扇足横游)、小堀流の踏水術(立游)、観海流の平游(蛙足平游)が、泳法上特に優れていると述べ、再編に言及している。

「今日社会の進歩と共に游泳の道も亦進歩せざる可からず故に本校游泳部が正に取らんとする所の方針は各流各派に偏せずして實用に適するもの、体格の均整なる發達に叶うも

の、形式の勇壮にして美觀を備ふるもの、精神の修養に価値あるべき技術と其練習方法に就いて其の精神を抽き之を整然たる教目に組織して斯道を以て教育の資料に最も価値あるものたらしめんとするにあり」(校友会誌 5, 1904, pp. 191-192)

ここでは、高師泳法が伝統的な水術を実用的かつ美的、教育的に再編した泳ぎであることが述べられている。特に「教育の資料」とある部分が特徴で、教育の場で展開しやすいように再編されていた。具体的には、各泳法を段階的に教えるようになっていて、十日余りという短期間で習得しやすい内容になっている。扇横游の後に、扇横游一段、それができれば同二段、という具合に段階的な配列がなされた。「立体泳法」では「立泳」のみに簡素化された。このような再編は東京高師のほとんどの卒業生が中学校や師範学校の教師に就いたことから、游泳の全国的普及を視野に入れた再編と言える。また実用的ということばで示されているように、さまざまに変化する海浜での実習に適した泳ぎ方を模索していったものと思われる。

高師泳法についての考えは、游泳部編集の「游泳教授要録」にも示されている。

「第一、一意、実力の養成を旨とし、各派より専ら、実用的泳法を抜き、之を必須科目とし、其他の諸泳法は、隨時、之を授け、以て必須水泳法の円熟を期す。」

第二、第三（略）

第四、一級以上の部員は之を研究生とし、広く、水泳術及教授法の研究に任じ、以て各派を統一して、日本国における完全なる水泳法を作ると共に、完全なる教授法を定めんことを期す」（游泳教授要録、1913）

嘉納は流派にこだわらない教育現場で展開できる実用的泳法とその教授法の確立を目指して水術を再編しようとした。「高師泳法」は水泳を普及させる点に力点が置かれていたといえる。教育現場でも行える水術、つまり水術の標準化を目指して、再編をはかったものと解釈できよう。ただし、ここで付言しておくべきは、嘉納が自ら游泳教目の選定を行ったものではなく、中野次郎をはじめ

とする水術の教師が行っていることである。嘉納は水術再編の方向性を示し、それに基づいて水術の教師が具体的な游泳教目を選定、編成したのであった。

## 2) 高師泳法の游泳教目

1904年の実習の教程に示された「高師泳法」は扇平游、扇横游、扇横游一段、扇横游二段、蛙平游、背游、蛙平潜、互抜手扇平游正体、同上略体であった。そして1909年までに手を加えられ、高師泳法として確立された。「校友会誌 13」(1907, pp. 125-126) では、「故に教目中には横體平體立體之各泳法を含み、壯麗なる神伝流も迅速を貴ぶ水府流も、遠きに耐へる観海流も、立體の蘊奥とも云うべき小堀流踏水術等皆編入してある、一言にして言えへば諸流を統一整理したる一新派、我校特有の泳法である」と説明されている。

そこで、高師泳法の游泳教目は、どのような流派の泳法から構成されていたのかについて検討したい。

表3は1913年の高師泳法の教目である。この游泳教目の第一游法、第二游法が基本の泳法で、それに手と足の動作を加えて行くことで、より複雑な泳ぎもできるよう、段階的・合理的な配列になっている。

第一游法から第四游法の説明には、水府流太田派と神伝流の泳法の両方が備えられている。例えば、扇横游一段と同二段においては、水府流太田派は、前方に伸ばした手を戻す際に、肘を伸ばしたまま水中を搔いて体側に戻すのに対し、神伝流では、肘をやや曲げて水面に近い所を搔きながら戻すという相違があるが、高師泳法においては、肘を伸ばすか屈曲するかについての説明はなされていない。また、第六游法で触れられた水府流太田派大抜手に関して、神伝流との違いを強調した速く泳ぐことについては言及されていない。扇足を用いた泳法については、細部を特に規定しないままにしており、教育現場に応じて教授しやすいように幅を持たせている。

潜水法の扇平游では、扇足と敵足を用いるので、神伝流の水中羽交伸方が最も近い。神伝流の泳法もかなり高師泳法に組み込まれたといえる。

表3 高師泳法の教目（1913年）とそれに類する他流派教目<sup>注5)</sup>

|      | 高師泳法教目名  | ほぼ同様の他の流派の教目名                |
|------|----------|------------------------------|
| 第一游法 | 扇横游      | 眞泳法（神伝流），一重伸略体第一種（水府流太田派）    |
| 第二游法 | 扇平游      | 草泳法（神伝流），両輪伸（水府流太田派），身泳（向井流） |
| 第三游法 | 扇横游一段    | 二段伸（神伝流），一重伸（水府流太田派）         |
| 第四游法 | 扇横游二段    | 三段伸（神伝流），二重伸（水府流太田派）         |
| 第五游法 | 片拔手扇横游一段 | 片拔手（水府流太田派）                  |
| 第六游法 | 互拔手扇平游   | 片手拔（神伝流），大抜手（水府流太田派）         |
| 第七游法 | 立泳       | 踏水術（小堀流）                     |
| 潜水法  | 片蹴潜，蹴潜   |                              |
|      | 水中での扇平游  | 水中羽交伸（神伝流），水中両輪伸（水府流太田派）     |
| 跳込   | 逆跳       | 翡翠（神伝流），逆跳（水府流太田派）           |
|      | 直跳       | 直跳（水府流太田派），岩跳（神伝流），順化（向井流）   |
|      | 平跳       | 逆下（向井流）                      |
| 応用   | 片拔手扇横游二段 | 片拔手一重伸（水府流太田派）               |
|      | 早抜手      |                              |
|      | 蛙平泳      | 蛙足平泳（観海流）                    |
|      | 諸手横游     | 諸手伸（神伝流），諸手伸（水府流太田派）         |

扇足を用いた泳ぎは水府流太田派と神伝流の両者を兼ね備えた泳法である。立泳は小堀流、潜水は神伝流と水府流太田派、そして跳込法は、神伝流、水府流太田派と向井流、それらに遠泳などの蛙平泳にみられる観海流を合わせて構成された泳ぎといえる。特に、水府流太田派のみならず、神伝流の要素がかなり組み込まれていた。これは高師泳法が構成された際に、中野次郎という神伝流の師範がかわったことも起因していると思われる。高師泳法とは、水府流太田派の俗称ではなく、水府流太田派や神伝流を中心に諸流派を統合した泳法であったと言える。

水府流太田派の俗称と言われたのは、本田存が長く東京高師の游泳教師として担当したためと思われる。本田は高師では高師泳法、附属中では水府流太田派の泳法というように、立て分けて教授したのだが、それが混同されて解釈されたものと考えられる<sup>注4)</sup>。

### 3. 高師泳法の展開

#### 1) 予科生の必修

嘉納は、高師泳法の教育現場への普及をめざし

た。そのため、東京高師の予科生（新入生）には、全員が游泳実習に参加することを校長名で義務づけた。高師泳法が編み出された翌年の1905年から、東京高師の予科生が全員游泳実習に参加することになった。文科・理科という専攻にかかわらず、全ての一年次生は2週間、北条海岸で過ごした。これは「高師泳法」を普及させようとする嘉納の熱意と読み取れよう。1905年の水泳師範は中野次郎のほか、助手に一高の生徒が参加した。

嘉納がいかに游泳実習に力を注いだかについては、校友会誌の記事から読み取れる。嘉納は交通の便の良くない中、ほぼ毎年北條まで赴いている。やがて参加者が増えるにつれて、間借りの宿舎では十分な実習ができないことから、専用の宿舎建設の議が起り、嘉納は自ら足を運んで交渉に当たったことが嘉納の書簡（1910）からうかがえる。1906年に游泳部の宿舎、芳躅舎が完成した。芳躅とは芳しき跡という意味で、嘉納校長の命名であった。この年、つまり高師泳法の基礎が確立されてから水府流太田派師範、本田存を師範に加えた。この年の師範は向井流の菱倉嘉吉、水府流

太田派の本田存、神伝流の中野次郎であった。これらの顔ぶれからも、高師泳法は水府流太田派のみに固執したものではないことは明らかである。

### 2) 関東連合游泳大会の開催

1906年、第一高等学校と連合して8月6日に北條海岸において、第一回関東連合游泳大会が開催された。ほかに安房中、開成中、東京高師附属中がこの大会に参加した。実施された種目は模範泳法（神伝流、水府流、向井流、観海流、踏水術）と競泳（100ヤード、200ヤード、団体競泳、各校遊戯）で、終了後には懇親会が行われた（校友会誌11、1906、pp. 12-13）。この大会はこれ以降毎年開催され、やがて東京高師、一高、外国語学校、早稲田大、安房中、開成中、川越中、東京高師附属中、水産講習所、埼玉師範、高等商業学校などが参加した。このような、競争的な方法の活用は嘉納の基本的な考え方であった。競争的な方法は若者が体育に興味を持たせるのに役立つと嘉納は考えていた。

### 3) 段級制の導入

1902年にはすでに段級制が導入された。班別の指導及び活動が行われていて、期間中行われる遠泳終了時や級別進級試験など数回の機会に隨時進級者が発表された。進級の基準に関しては1902年から1905年の校友会誌に記載されている。当初の進級基準は遠泳の距離によるものであったが、1903年より技術的なものが加わった。さらにこの4年間の資料から、徐々に進級基準の距離が長くなり、年々参加者の泳力が向上したことがうかがわれる。こうして生徒の泳力に応じて、各級の内容も変更された。段級も取り入れ、特に優秀

な生徒には、段位証が嘉納校長より授与された。1904年、冬の游泳会において、東京高師講堂にて三里及び一里半の游泳者27名に賞牌、優等生3名に初段証を嘉納校長が授与し、1時間訓諭したことが述べられている（校友会誌5、1904、pp. 191-192）。

二級（表4参照）になると指導者の資格が得られたので、二級を取得することが、一定の目標であった。つまり、高師泳法がほぼできることが目標であったのであり、これは各流派においてそれぞれの秘伝の泳ぎを修得する事に比べれば、かなり容易であった。このことからも游泳の普及をめざして作られた段級の構成であったと言える。

### 4) 指導者派遣と文部省への働きかけ

各中学校に游泳の指導者として学生を派遣したのは1906年からであった。游泳部発足後4年で「高師泳法」を全国に伝える手立てが考えられたと言える。東京高師では、二級に進むと校長名で中学校の水泳指導資格が与えられた。彼らは全国の中学校の水泳指導に赴いて高師泳法を教えた。その数は年々増え、1911年以降は、10校前後の中学校や師範学校に水泳教師を派遣した。例えば、1914年に水泳指導者を派遣した先の学校は次の通りである；

新潟県高田師範学校、新潟県高田中学校、水産講習所、石川県師範学校、石川県立小松中学校、東京府立第二中学校、千葉県水産講習所、奈良県師範学校、福岡県小倉師範学校、山口県室積師範学校、新潟県能生水産学校。

多くの卒業生が中学校や師範学校に赴任したので、高師泳法は徐々に普及していった。嘉納は文

表4 東京高師における游泳の各級基準（1913年）

|    |  |
|----|--|
| 五級 | 扇平游、扇横游、扇平潜、跳込練習、遠泳五町以上  |
| 四級 | 扇平游、扇横游一段、同二段、互抜手扇平游、立游、蹴潜、平游、直跳、浮跳、遠泳二浬以上、潛水五間                  |
| 三級 | 扇横游一段、同二段、互抜手扇横游一段、扇平游一段、互抜手、早抜手、逆跳、平跳、扇平潜一段、立游、諸手横泳、遠泳三浬以上、潛水十間 |
| 二級 | 蛙平游、手縁横游、片抜手扇横游一段、片抜手手縁横游、一跳、小抜手、立游、遠泳五浬以上、潛水十五間                 |
| 一級 | 諸流游法、救助法、潛水二十五間  |

部省にも高師泳法を認識させるために働きかけた。1916年8月1日より14日までの2週間、初の文部省主催の水泳講習会が北條海岸で行われた。東京高師の卒業生で師範学校や中等学校の教員34名を含む60名余りの受講生を集めて、游泳の指導に関する講習と実技指導が行われた。これには千葉真一など造士会水術に関わった者が講師として担当した。文部省からは田所普通学務局長が主催者の代表として参加した。さらに同年9月1日には、高田文部大臣を北條に招き、東京高師の游泳を見学させた。これについて文部大臣が「非常に満足せられ、且游泳の必要なる事を感じたから、或は中学等に游泳を正科にするかも知れない。その時教師が不足をしてはすまないから、皆熱心に練習せよ」(校友会誌55, 1916, pp. 109-110)と話したことが記されている。

1928年文部省発行の「水泳指針」では、水泳の基本的な泳ぎとして、クロール、背泳などのほか、

蛙平泳、扇平泳、一重伸（横游一段）、互抜手泳、片抜手泳、立泳などの高師泳法の教目が解説されている。また1924年発行の海軍省教育局発行の「游泳術教範」には、横一段、横二段、片抜手横一段、片抜手横二段、諸手横游、扇平游、蛙平泳、互抜手などの高師泳法が、必要な教目として解説されている。嘉納校長が教育界に送り出した人材で、高師泳法の泳ぎが教育現場に取り入れられていったと言える。

伝統的な流派にこだわらない、游泳大会の実施、段級制の導入、中学校等への指導者の派遣などは、嘉納が柔道で展開した方法と同じであり、水泳についても同様の手立てが取られた。このように、国民体育の振興と青少年の心身の教育という観点から取り組まれた、嘉納による水術の再編は、水泳の教育現場での普及に貢献したと言えよう。

表5 嘉納による水術の再編

|            | 造士会水術                                       | 高師泳法                             |
|------------|---|----------------------------------|
| 水泳場開設年     | 1897（明治30）年                                 | 1902（明治35）年                      |
| 水術設立年      | 1898（明治31）年                                 | 1904（明治37）年                      |
| 対象生徒       | 嘉納塾塾生と東京高師附属中生徒中心                           | 東京高師生徒                           |
| 游泳場の場所     | 相州松輪、上宮田、金田                                 | 房州北條                             |
| 運営組織       | 造士会   | 東京高等師範学校游泳部                      |
| 水術師範       | 水府流太田派、神伝流、向井流、小堀流                          | 神伝流、小堀流、水府流太田派、觀海流、              |
| 嘉納の立場      | 会長  | 校長、校友会会长                         |
| 泳法に及ぼした流派等 | 「日本游泳術」の泳法（水府流太田派）中心                        | 「日本游泳術」、神伝流、向井流、觀海流、小堀流を参考に再編    |
| 理念         | 各流各派に偏せずして實用に適する水術、講道館柔道に匹敵する水術             | 各流各派に偏せずして教育に資する水術、教育現場への普及      |
| 游泳大会       | 水泳場毎に游泳大会を行う                                | 学校独自の游泳大会と関東連合游泳大会を実施            |
| 段級         | 甲乙丙丁から十段まで                                  | 5級から初段まで                         |
|            | 1904年以降は嘉納塾のみ、大正以降は行われなくなる。附属中では水府流太田派として継承 | 第二次大戦まで行われる。戦後（東京教育大）は横泳ぎとしてのみ継承 |

### III まとめ

嘉納は、都会の喧噪を離れ、共同生活をしながらの海浜での游泳は、心身を鍛錬するのにふさわしいと考えていた。嘉納が拠り所とした游泳は、太田捨蔵の遺稿集『日本游泳術』に示された理念、すなわち、各流派の長所を束ねて広く水術を普及する、というものであった。この考えをもとにして、式游、游泳大会、さらに段級制度を導入し、造士会で行われた水術を「造士会水術」と名づけた。

東京高師での游泳実習が始まると、嘉納の水術再編の考えのもとに集まった水術の教師らにより、水府流太田派、神伝流、小堀流、觀海流などの泳法を統合した「高師泳法」が編成された。この水術は、生徒の水術技術の習得と教育現場での普及をめざした泳法で、手足の動きがわかりやすく、段階的配列で教えやすくなり、その意味で教育的な内容になった。嘉納は私塾での「造士会水術」に、より教育的な視点を盛り込んだ「高師泳法」の編成を企図し、教育現場での水術の普及を試みたといえる。

嘉納が主導した水術再編の特徴をまとめると、次のようにだろう。

- ・青少年の身体の鍛錬と精神の育成をめざして、「造士会水術」、「高師泳法」の編成を企図した。特に「高師泳法」は教育現場での普及を考慮して編成された。
- ・「造士会水術」の游泳教目は太田捨蔵の遺稿『日本游泳術』をもとに本田存（水府流太田派）に、「高師泳法」の游泳教目は中野次郎（神伝流）に編成させた。後者は神伝流や小堀流など、各流派の泳法の要素を広く取り入れて編成された。
- ・実習中に游泳大会や式游（模範泳法）を開催し、生徒に興味を持たせつつ、練習の効果が実感できるように工夫した。
- ・段級制を取り入れた。

嘉納治五郎は水術について以上のような再編を主導したのであった。

### 注

- 注 1) 石川（1930, pp. 18–19）によれば、「游」は史記亀策伝に「亀千歳，乃游\_蓮葉之上\_」とあることから、浮かび行く事で、「泳」は水中を潜行する事と説明している。つまり「游泳」とは水上のみならず、水中での移動も含めた泳ぎの意味である。
- 注 2) 1903年以降、嘉納塾以外の3つの塾は次々閉鎖されてしまい、「國士」も刊行されなくなり、造士会としての活動は嘉納塾のみとなっていく。したがって、造士会独自の活動は、1899年から1903年までの数年間のみであった。
- 注 3) 東京高師附属中では「日本游泳術」のままの泳法が引き継がれて行った。「造士会水術」は嘉納塾中心の第一水泳場と附属中中心の第二水泳場と、泳法がやや異なって受け継がれた。この相違について東京高師附属中水泳部（桐游会俱楽部, 1985）は次のように説明している。本田は1904年から附属中学校の水泳師範として游泳実習に関わると、附属中の水泳教場（富浦）が水府流太田派の水泳教場と自身が考えるほどに水府流太田派の伝授に力をいた。附属中の游泳実習を北条海岸で行うとの意見について本田は、附属中の生徒を高師水泳部に委ねることは、水府流太田派の終息になりかねないと考え反対した。これらのことから1904年以降の本田は、附属中の水泳を通して水府流太田派の継承に力を入れ始めたと考えられる。東京高師附属中の游泳実習では、本田存を師範に卒業生が助手となり、水府流太田派の泳法のみが伝授され今日に至っている。
- 注 4) 1906年から本田は東京高師の游泳実習に教師として参加するが、水府流太田派の泳法のみではなく、高師泳法も教えた。東京高師においては、嘉納の発想に基づいて行われたので、本田は立場を弁えて指導したと伝えられる。しかし嘉納の校長辞任（1920年）後に本田が水泳教師として長く東京高師の游泳実習を担当していく中で、水府流太田派の泳法が強調され、高師泳法との相違が不明瞭になっていったものと思われる。
- 注 5) この表は石川（1960, pp. 315–317）による水府流太田派と高等師範游泳教目、および神伝流との比較をもとに、筆者が作成した。

## 文 献

- 長谷川武（1990）大日本游泳術，日報通信印刷，pp. 74-75.
- 石川芳雄（1960）日本水泳史. 米山弘発行. pp. 313-314.
- 嘉納治五郎書簡（1910）5.26 付, 6.30 付（宿舎増築に関する嘉納の交渉を示す書簡）。
- 嘉納治五郎（1917）国民の体育について. 愛知教育雑誌 356. pp. 3-18.
- 海軍省教育局検閲（1924）游泳術教範. 兵用図書. pp. 9-85.
- 嘉納先生伝記編纂会（1964）嘉納治五郎. 講道館, p. 577.
- 文部省（1928）水泳指針. 山海堂出版, pp. 14-23.
- 高橋雄次郎編（1900）日本游泳術. 造士会. 序. pp. 1-3.
- 高橋雄治編（1919）増補改訂大日本游泳術. 水交会,

pp. 22-24.

- 桐游会俱楽部編（1985）桐陰会水泳部八十周年記念誌. (株)ナール. pp. 30-33.
- 東京高等師範学校校友会編 校友会誌 3 (1902), 5 (1904), 11 (1906), 13 (1907), 55 (1916).
- 東京高等師範学校校友会編（1911）本校創立四十年記念校友会発展史. pp. 151-153.
- 東京高等師範学校校友会游泳部（1913）游泳教授要録. 15ps.
- 浦辺秀夫（1952）学校体育に寄与した人々. 学校体育 5-7 : 28-31.
- 財団法人日本水泳連盟日本泳法委員会編（2001）日本泳法 12 流派総覧下巻. pp. 225-269.
- 造士会編 國士 1 (1898), 9 (1899), 10 (1899), 11 (1899), 12 (1899), 22 (1900), 24 (1900), 36 (1901), 48 (1902), 60 (1903).

（平成 18 年 11 月 10 日受付）  
 （平成 19 年 3 月 24 日受理）